論　文

日本語と現代ギリシア語の天候に関する諺対照研究（2）
－天候と生活－

浮田　三郎

はじめに

日本語と現代ギリシア語の諺の世界には、興味ひかれる天候に関する諺が少なくない。そこには、それぞれの国民が大自然を相手に上手に生活していくために、長い間の経験から、色々な知恵を結集して、様々に変わる天候と付き合っている姿が窺える。したがって、それらの諺にはそれぞれの国あるいは地域の自然環境や社会風土・慣習が関係しているように思われる。

両国の諺で天候に関連した表現の中には、いわば天気予報のようなものや季節に関連したものや天候と習慣の関係などに言及したものなど興味惹かれる表現があり、天気予報の諺に関しては「日本語と現代ギリシア語の天候に関する諺対照研究（1）」[1]で述べたが、その他にも両国の発想の仕方にも言及できるような興味深い諺が見られるので、今回はそのような諺を考察してみる。

したがって、本稿は、上記の小論に続くもので、日本語と現代ギリシア語の天候に関する諺の中で、季節に関連したものや天候と私達の生活、習慣の関係などに言及した諺を対照比較して、両語の表現の仕方やその背後にある文化、社会風土や自然環境の相違点や類似点を考察してみる。

両国の諺の対照比較にあたっては、日本語の諺として金子武雄(1983)を中心に[2]、また　現代ギリシア語の諺の場合はΜιχαήλ－Δέδε, Μαρία (1981)を中心に[3]、比較的よく知られていると思われる当該の諺を取り出して検討してみる[4]。

また、以下に挙げる現代ギリシア語の表現には逐語訳を付ける。

1、天候と生活様式

1）天気と農耕と牧畜

私達の生活の中で天候が関心事でない時は少ないことは言うまでもなく（cf. 浮田，1995）、特に戸外での仕事に従事している人々にとっては、大きな関心事であることは間違いない。私達の伝統的な生活様式がどのようであったかを言うことは容易ではないが、古くからの諺の中では、天候と農耕生活あるいは牧畜の生活様式との関連で語られているものあるいはそれを暗示するような諺を見ることができる。例えば、

(1) 日照りに不作なし
(2) 秋日和半作
(3) 秋の稲妻千石増す
(4) 二百二十日の荒れじまひ
(5) 秋の彼岸は農家の厄日

(1)は、上でも述べたが、時期を得た日照りは人々の生活にとってたとえ暑くとも、農作にとっては良い結果をもたらすと言うのである。また、(2)では、収穫の頃の晴れの日は、収穫の成果に対して、それまで長い間面倒を見てきたその期間と同じくらい大切だと言うのである。(3)は、期待を込めての表現であろう。日本でもギリシアでも「雷がすれば雨」と言うような諺がある（cf. 浮田，1995）が、もちろん「稲妻」は、「雷」とは別物であり、この諺では、古代の農民の間では、「稲の夫（つま）」と考えられ、稲と霊的に結合して穂を実らせると考えられていたようである。

(4)と(5)では、秋の天候の特徴に言及している。この頃になると必ずと言っていいほど台風が日本列島に上陸することからこう言われるのである。天気をよく知っておれば、農作業もスムーズにできると言うものである。

それに対して、現代ギリシア語の諺には、次ぎのように、太陽と雨が適当な時期に降ってくれると、農家にとっては大きな利益につながり、人々の生活が豊かになることに言及しているものがある(6)。

(6) *Ήλιος και βροχή παντρεύονται οι φτωχοί.*
sun and rain get-married the poor
太陽と雨で、貧乏人が結婚する。

(7) *Αν τα Φώτα φωτερά και τα Λαμπρά σκοτεινά χαρά στο βού και το ζευγά.*
if the Epiphany bright and the Easter dark joy to-the ox and

the plowman
顕現祭が明るく復活祭が暗ければ雄牛と農夫にとっては喜び。

また、(7)では、顕現祭の頃（クリスマスの頃）は晴れていて、復活祭（即ち春先）の頃に雨が降ってくれると、牧草は育つし、農作物も良い収穫が期待されることが暗示されている。
ところが、次ぎの諺は、どうであろうか。

(8) Ήλιος και χιόνι παντρεύονται οι αρχόντοι.
sun and snow get-married the rulers
太陽と雪で、主君が結婚する。

(8)の諺では、農業や牧畜に携わる人々の晴雨のバランスのとれた天候に対する喜びが表されているが、この諺では、貧乏人や農夫に対して「金持ち」は、晴れになろうと雨であろうと雪であろうと、天候に左右されない生活を送っていることを暗示している。これは、どこの社会でも同じであろう。

(9) Πέντε μήνες καλοκαίρι, νάταν να θερίζαμε.
five months summer, it-would-be to we-reap
夏五カ月、されば収穫できよう。

また、(9)の諺では、夏（καλοκαίρι）には「良い天気」が五カ月も続き、好天が長く続けばそれだけ長く収穫できるということにも言及している。好機（時期）を逃すなということも教えている。

2）天気と習慣

上で述べた農耕や牧畜の生活様式とも関連するが、一般の生活習慣との関連で述べられている諺も見られる。日本語の諺の場合、「天気予報の諺」（cf. 浮田, 1995）でも挙げているが、例えば、

(10)朝雷に戸を開けな
(11)朝雷に川渡りすな
(12)朝雨馬に鞍置け
(13)夕紅に鎌をとげ

(14)梟の宵鳴き糊摺って待て

などのように、日本人の生活習慣の一部が暗示されている。

現代ギリシア語の諺の場合はどうであろうか。次ぎのような諺の中にギリシアの人々の生活習慣が窺えるようである。

(15)Από καιρό κι απ'αφεντιά.
from weather and from lordship
天気により主人により

これは、「長いものには巻かれろ」か「明日は明日の風が吹く」式の考え方であろうか、天気にも逆らえないし、主人に逆らってもろくなことはないという考え方は日本でもある。天気と関連しては、上のように、日本語の諺では「風」が登場する。

(16)Μηδέ τσοπάνος στα βουνά, μηδέ ζευγάς στον κάμπο.
may-not-too shepherd in-the mountains, may-not-too plowman in-the field
山に羊飼いもなく、野に農夫もなく。

(17)Όταν ο καιρός είναι καλός βάστα πανωφόρι, κι όταν βρέχει κάμε ως θέλεις.
when the weather is good carry overcoat, and when it-rains do as you-want.
天気が良い時はオーバーコートを持って行け、雨が降る時は好きなようにしろ。

(18)Μη ξαλαφρώσεις το κορμί όσο ο Έλυμπος είναι χιονισμένος.
may-not you-lighten the load of the body so long as the Olympus is snowed.
オリンポスが雪を被っているうちは荷物を降ろさぬように。

(16)は、冬の様子をよく表現している諺である。冬には、農夫は畑の仕事も無くなるのは日本の農村の冬の風景と同様であるが、羊や羊飼いが冬を越すために山から下りてくる光景は日本の風景にはなじみがない。

(17)は、天気は変わりやすいので天気が良くても雨が降った時の用意をし

ておけと「転ばぬ先の杖」的な諺であるが、次ぎに続くフレーズでは、既に雨が降っているのであるから必要な物は当然分かっているということである。したがって、不意を打たれて風邪など惹いたりはしないであろう。

(18)では、春先の季節を連想させる諺である。雄大な自然を背景に、まだオリンポスに雪がある内は寒い日を予期して、それに対応できるようにしていなさいと教えている。

(19)Το χειμώνα νερό μαζί σου και το καλοκαίρι κάπα.
the winter water with you and the summer capote
冬は雨が供、夏は合羽が供。

ギリシアで「冬」とは、雨が降る季節とイメージしても良いであろう。したがって、普通は雨に対する用意はできている。一方、「夏」とは良い天気の季節のことであり、したがって、めったに雨は降らないが、それでもくずれるときもある。その時のために合羽を用意しておけと言うのである。

(20)Βρέχει ο θεός και φταίνε οι μήνες.
it-rains the god and are-blamed the months
神が雨を降らし月が罪を負う。

雨が降る。それは神が降らせる（cf.34）にもかかわらず、「雨の降った月が悪い」と月が責任を負わされることになることから、比喩的には何か悪いことや不運なことが起こるとそれを何か他のせいにするときの比喩にも使われる。

(21)Αν δεν βρέξει πώς θα ξαστερώσει.
if not it-rains how will it-clears up
雨が降らなければ、如何に天気が良くなるか。

自然の中では雨が降るのは自然で、降るからやがて晴れにもなると言うのであろう。人生も「山があれば谷もある」と暗示しているようである。
また、次ぎのように、自然の現象を比喩的に使用した諺もある。

(22)Του κακού καιρού τα νέφη, το να πάει και τ'άλλο στρέφει.
of-the bad weather the clouds, the one goes and the other turns

悪天候の雲、行くものあり返るものあり。

(23)Του κακού καιρού τα νέφη άλλα πάνω κι άλλα κάτω.

of-the bad weather the clouds the other above and other below

悪天候の雲、あるものは上にあるものは下に。

(22)は、悪天候の雲が去ったと思ったらまた返ってくるというので、日本語の諺「一難去ってまた一難」とも似ている。悪天候が続く状態を語っている。(23)も同様の内容の諺と理解してよいであろう。

2、旱魃と洪水（晴れと雨）

拙稿，1995[1]でも述べているが、天候はしばしば私達の生活に大いに影響を及ぼしている。近年人間の知恵は科学という面で随分と発展してきているように思えるが、大自然の猛威の前ではまだまだ大人と赤子の力関係のように思える。先進国と言われる欧米でも、大洪水もあれば旱魃もあり、甚大な被害に及んでいることが新聞やテレビなどで報道されたことも一度や二度ではない。

人間は、古くから旱魃や洪水に対して様々な思いを抱いて接してきたようである。こうした旱魃と洪水に言及した諺は、日本語の場合は、

(24)百日の日照りには困らぬが三日の洪水には困る

(25)千日の旱魃に一日の洪水

のようなのがあるが、「洪水」は、私達の町や村を押し流したり、使い物にならないようにしたりする。「日照り」や「旱魃」も農業や牧畜業にとって歓迎すべきものではないと思われるが、洪水と比較すると取るに足らないようである。また、次ぎのような諺を見れば、時期を得た「日照り」は、そのときは暑くとも農業にとっての成果は期待できると言及する。

(26)日照りに不作なし

現代ギリシア語の諺の場合、「洪水」と明言はしていないが、明らかに大雨が降り、被害をもたらすことを暗示しているものに、次ぎのようなものがある。

(27)Ανοίξανε οι καταρράχτες τ'ουρανού.

opened the water-falls of-the sky

天の滝が開いた。

(28)Χάλασε ο κόσμος.

broke the world

世界が壊れた。

(27)では、空から滝のように雨が降ってきて、地上の世界に大きな被害を与えることを暗示している。(28)の表現は、突然降ってきた大雨が、地上の世界に大きな被害をもたらしたことに言及しているが、文字通り「人々が大騒ぎ」をするような場合にも使用される。

現代ギリシア語の諺には、「日照り」そのものを表現する諺は見られないが、次ぎのような表現を参照してみることができる。

(29)Σκάει κι ο τζίτζικας.

bursts(/runs away) also the cigada

蝉も逃げ出す。

逆に、この諺では、「日照り」を明言してはいないが、夏の猛暑を暗示しており、夏の「蝉」でさえも我慢できないひどい暑さに言及していて、おもしろさを狙った表現である。

他方、日本語の諺で、暑さに言及したものに次ぎのようなものがあるが、

(30)朝曇りは禿頭が泣く。

この場合は、やはり「日照り」で、直射日光の強さを暗示しているもので、これもおもしろさを狙った表現と考えることができるが、暑さでも現代ギリシア語の諺とはイメージが相当異なっている。

3、恵みの雨

晴れが私達の生活にとって好ましいことは言うまでもなく、続く日照りでさえも時節を得た日照りなら農作には好影響を与えてくれるということに言及する諺も多いが、雨が私達の生活にとって好ましいと言う諺も少なくない。

これまでにも見てきたように、雨は、時には人間社会に大小様々な被害を

与えることもあれば、他方生きているものにとっては無くてはならないものでもある。したがって、時により場所により、雨を加害者と見立てての諺もあれば、恵みの雨と見立てての表現もある。

即ち、「雨」は自然界にとって、即ちまた我々の生命にとっても大切なものであり、歓迎あるいは必要とされるものとして表現されている諺もある。例えば、日本語の諺では、

(31)雨は花の父母
(32)雨降って地固まる
(33)雨は天から涙は目から

などがあり、(31)は、まさに雨は大地の生命のもとであることを謳っている。(32)は、雨の効用とでも言うべきものであろうか、もちろん比喩的に使用される。

(33)は少々意味あいが異なる。泣いたりしてもこわくはないよということであり、雨も涙も自然のことであり、ことさら気にすることではないということであろう。

また、ギリシアの諺にも次ぎのようなものがあり、

(34)Το νερό είναι του Θεού.
the water is of-the God's
水は天のもの。
(35)Ήλιος και βροχή του Θεού η ευχή.
sun and rain of-the God's the wish.
太陽と雨は神の希望。
(36)Η Βροχή είναι χρυσή.
the Rain is golden
雨は金なり。
(37)Αν δεν βρέξει ας ψιχαλίσει
πάντα κάτι θα δροσίσει.
if not it-rains may it-drizzle
always something will it-refresh
雨が降らなければ霧雨が降りますように、
いつも何かが気分を爽やかにしてくれる。

(34)(35)は、天からの贈り物あるいは神の望みだと言っている。その点では、上の日本語の諺(33)は、表面的には似ているが、内容的には異なる。(36)は、現実的に人々が所有したいと思っている物を上げて、雨の重要さを強調している。これら三つは全て、「恵みの雨」に言及している。さらに、(37)のように、リフレシュメントの効用を果たしてくれる雨は、冬の冷たい雨とは別で、歓迎される雨である。雨が降ればそれに越したことはないのであるが、そうで無ければ、霧雨でも降って欲しいと言っている。

4、季節の天候の特徴

次ぎに、季節による天候の特徴に言及した諺を対照してみよう（cf.浮田，1995）。日本語の諺には次ぎのようなものがある。

(38)花曇り七日
(39)栗の花盛りには晴天続く
(40)変わり易いは秋の空
(41)雪のあしたは裸の洗濯
(42)冬の雨は三日降らぬ

これらを見ると、「春夏秋冬」にわたって天候の特徴を述べている。
また、次ぎのような諺は、日本特有の台風に言及したもので、ギリシアの風土と対照してみると、大いに特徴あるものだとわかる。

(43)二百二十日の荒れじまひ
(44)秋の彼岸は農家の厄日

即ち、二百十日や二百二十日あるいは秋の彼岸にはよく台風が日本に上陸するということ、また、大体この頃で台風の季節も終わりになるといった日本の季節の特徴を知っていなければ、これらの諺の表現を理解するのは易しくない。
また、この二つと、(39)の諺は農作業と深い関連で言われていることも分かる。
ところで、現代ギリシア語の場合は、次ぎのようなのがあり、

(45)Του Ιουνίου το νερό χαλάει τον κόσμο.

of-the June the water breaks the world
6月の雨は世界を壊す。

6月は、普通は晴天が続くが、雨が降ると大雨になることがよくあり、地上の世界に大きな被害を与えると言及している。これは、日本の梅雨とは全く異なった気象状況の下での出来事である。即ち、ギリシアの6月は、既に夏καλοκαίριの季節で、現代ギリシア語でκαλοκαίριとは「良い季候」といった意味で、ほとんど雨の降らない季節なのである。したがって、予期しないときに降る大雨のために被害がより甚大になるということも暗示しているのであろう。

(46)Νερό του απρίλη παχαίνει το βόδι, σκοτώνει το γουρούνι και η προβατίνα γελάει.
4月の雨は牛を太らせ、豚を殺すが、羊は笑う。

(47)Ήρθε το καλοκαιράκι στρίβει ο γέρος το μουστάκι μα όταν έρθει ο χειμώνας πάει ο γέρος βλαστημώντας.
he-came the summer he-turns the old the moustash but when he-come the winter he-goes the old blaspheming
夏が来たら老人は口ひげを曲げるが、冬が来ると老人は不平を言いながら行く。

(46)は、おもしろい表現である。4月に降る雨は牧草を育て、牛や羊にとってはとても良いことであるが、実はこの頃雨が降ると、牧草や雑草が育ちすぎて、小麦や大麦やからす麦などが育たなくなり、豚の食べ物になるもの非常に少なくなることを暗示している。

(47)では、夏は天気が良いので楽しく戸外を散歩したりカッフェで楽しんだりするが、冬の季節には家に閉じこもり「寒いとか楽しくない」とか不平を言っている様子に言及している。老人たちが口髭に触りながら、ギリシア・コーヒーを飲んでいる様子が浮かんでくる。

(48)Του ήλιου ο κύκλος άνεμος, του φεγγαριού χειμώνας.
of-the sun the cycle wind, of-the moon winter
太陽の輪は風、月の輪は冬。

これは太陽の回りに輪ができれば風が吹き、月の回りに輪ができると雨が

降ると予想するのである。「冬」とは冬のような天気ということで、雨の天気を暗示しているのである。

(49)Μη σε γελάσει ο βάτραχος, μηδέ χελιδονάκι αν δε λαλήσει τζίτζικας δεν είν'καλοκαιράκι.
may-not you laugh the frog, may-not-too swallow if not sing cigada not is summer
蛙も燕も汝を騙さぬよう、蝉が鳴かねば夏にあらず。

ここでは、蛙も燕も夏が来たといったようなしぐさをしても、蝉が鳴かなければ夏ではないので、蛙も燕にも騙されないようにしなさいと言っている。即ち、収穫などにも大切な夏の季節は明確に理解しておかなければならないということであろうか。(46)と同様、動物を使ったおもしろい表現である。

(50)Τα μαύρα νέφη του βορριά, τα κόκκινα του νότου και όταν είν'κατάμαυρα του κύκλου του σορόκου.
the black clouds of-the north-wind, the red of-the south-wind and when is very-black of-the cycle of-the south-east-wind
黒雲北風、赤雲南風、そして真っ黒なときはシロコスの季節。

これもギリシア特有の季節の特徴を表していると思われる。黒雲北風、赤雲南風は、それぞれ冬と夏の特徴であり、シロコスは、経験してみないと実感が無いかもしれないが、エジプトの砂漠からの熱風をこのように呼ぶようで、これが吹き込んでくると気温は40度Cを越す猛暑となるのである。

(51)Ο καιρός πουλεί τα ξύλα κι ο χειμώνας τ'αγοράζει.
the weather sells the woods and the winter them buys
天気は薪を売り冬はそれを買う。

これは理解し易い。天気の良いときに薪を作って用意をして、冬になるとそれを使用するようになると言っている。筆者の子どもの頃の田舎の情景が浮かんでくるが、ギリシアでも現在は都市ではこのような情景は見られない。

(52)Την Τυρινή και του βαγιώ
μπαίνει ο διάλος στο γιαλό.

the week before Lent and of-the palm
enters the devil in-the seashore
四旬節前の週とシュロの主日にアクマが浜に入る。

四旬節前の週とシュロの主日は、祝祭日で季節は春で、冬の悪天候も止み、漁師たちは海に出て行き漁をすることができるようになるという。表現では「διάλος＝διάολος（悪魔）」という語を使用しているが、「小舟」のことをこう呼ぶのだそうで、「διάλος」の響きは、「しかしまだ用心はしなさい」とも言っているようである。

季節との関連で語られている諺は、先に見た(9)、(16)、(17)、(18)なども特徴のある興味深い諺といえる。また、(9)、(17)、(18)は教訓的でもある。

5、晴雨の好き嫌い

また、晴雨の好き嫌いあるいはこれらを比較した諺には次ぎのようなものがある。

(53)五十日の日照りには飽かぬが三日の雨に飽く
(54)十日の晴れには飽かで一日の雨に飽く
(24)百日の日照りには困らぬが三日の洪水には困る
(25)千日の旱魃に一日の洪水

実際には、五十日の日照りは困るはずであるが、それよりも三日の雨は嫌なのである。もちろん洪水にでもなれば大変である。ところが、ギリシアの諺には、次ぎのような諺が見られ、

(55)Καλύτερα να πεινάς παρά να κρυώνεις.
better to you-are-hungry than to you-feel-cold
凍えるより飢える方が良い。
(29)Σκάει κι ο τζίτζικας.
bursts also the cigada
蝉も逃げ出す。
(56)Αν δεν βρέξει πώς θα ξαστερώσει.
if not it-rains how will it-clear up

雨が降らなければ、如何に天気が良くなるか。

(46)Νερό του απρίλη παχαίνει το βόδι, σκοτώνει το γουρούνι και η προβατίνα γελάει.

4月の雨は牛を太らせ、豚を殺すが、羊は笑う。

(55)の「凍える」と言う表現は、冬の雨の日を暗示しているようであり、寒い雨の日は嫌われている。当然であろう。ところが、(29)では、上でも見たように、非常に暑いことを表現しており、逃げたくなるほどの暑さに言及している。「良い天気の」夏は歓迎するが、猛暑は懲り懲りである。さらに、(56)では、雨の日も享受する態度を表明しているし、(46)では、雨は一方には良かったり、また他方には悪かったりするものだと自然の現象に言及し、比喩的にも人間世界にもこのようなことがあることにも言及しようとしている。

さらに、3（恵みの雨）でも見たように、雨を歓迎する諺も多く見られることも再度指摘しておこう。例えば、日本語の場合(31)、現代ギリシア語の場合(34)～(37)などであるが、そこでは、現代ギリシア語の諺の方に雨を期待する気持ちが多く見られるようである。ちなみに、ギリシアの年間の降雨量は、日本とは比較にならないほど少ない。

おわりに

以上、日本語と現代ギリシア語の諺の間には、似通った内容を物語っている諺も多くあるが、その表現の仕方は相当異なっている。

生活様式や習慣に関する諺では、一般的に言って、日本語の諺の場合が農耕生活、現代ギリシア語の場合は牧畜生活を示唆する表現が特徴であると言える。また、現代ギリシア語の諺には自然の現象を例えにした教訓的な諺が比較的よく見られる。

日照りや洪水に関連した諺では、実際には旱魃も被害をもたらすはずであるが、ここで見た限りでは、両語の諺で日照りの被害に言及したものは見られず、洪水や大雨は困ると言うものが多い。

これに対して、時節を得た雨は、私達に大いに有益であるという諺は多く「雨は天の恵み」的な考え方は両国に共通していると言える。

季節の天候の特徴に言及した諺の中にも、農業と関連した天気予報的なものが多く見られる。また、日本語の諺は、春夏秋冬の四季に言及しているが、現代ギリシア語の諺には夏と冬に関連したものが多く、雨のイメージは冬の

イメージと言ったものも多い。現代ギリシア語の諺では「春の雨」に言及したものも特徴がある。ギリシア正教の行事との関連で特徴がある諺もある。

晴雨に対する好き嫌いを表明した諺も多い。晴天が好まれるのは当然のようであるが、日本の諺ではそれに言及した諺が多いのに対して、現代ギリシア語の諺にはそのような諺がそれほど見られない。むしろ、現代ギリシア語の諺には「恵みの雨」を期待する諺の方が多いことも日本語の場合と対照的である。しかし、現代ギリシア語の場合でも、大雨や冬の雨は嫌われている。

注

1）浮田三郎、「日本語と現代ギリシア語の天候に関する諺対照研究（1）ー天気予報の諺ー」、『吉川守先生御退官記念言語学論文集』、渓水社、1995.3. なお、本稿が（2）になっているのは、実際には当稿の方が先に提出されたからである。

2）金子武雄、『日本のことわざ』（全4巻）、海燕書房、（一）評釈、（二）続評釈、1982、（三）評論、（四）概説・講説、1983 に取り上げられているものを中心に、特に、（三）評論の巻を中心に検討するが、尚学図書編集の『故事俗事ことわざ大辞典』も参考にする。

3）Μιχαήλ-Δέδε, Μαρία, 2500 Ἑλληνικές Παροιμίες (καί Λεγόμενα), Σπῦρος Ν. Μπογιάτης, Ἀθήνα, 1981の他、下記の参考資料・文献に掲げるものも参考する。

4）現代ギリシャ語の諺の解釈にあたっては、現在広島大学理学部に留学中のΠαναγιώτης Γρέκος氏を初め彼の友人などからも情報を得た。

資料・参考文献

池田彌三郎、ドナルド・キーン監修、『日英故事ことわざ辞典』、朝日イブニングニュース社、1982

石垣幸雄、『世界のことわざ・1000句集』、自由国民社、1986

浮田三郎、「日本語と現代ギリシア語（方言）の諺対照比較研究ー諺に見られる素材を中心にー」、『言語習得及び異文化適応の理論的・実践的研究』、広島大学教育学部、1988、pp.59-64

浮田三郎、「日本語とギリシア語の諺対照比較研究（4）ー諺の中に使用されたる素材「動物」（1）ー」、『広島大学教育学部紀要』、広島大学教育学部、1989

奥津文夫、『ことわざ・英語と日本語』、サイマル出版、1978
金子武雄、『日本のことわざ』（全 4巻）、海燕書房、（一）評釈、（二）続評釈、1982、（三）評論、（四）概説・講説、1983
関本至、「現代ギリシア方言に見る諺の修辞法」、『レトリックと文体』（古田敬一編）、丸善株式会社、1983
尚学図書編集、『故事俗事ことわざ大辞典』、小学館、1982
外山慈比古、「渡る世間に鬼はない<ことわざと論理>」、『月刊言語』、Vol. 12, No. 1, 1983, PP.30-35
Βενεζέλου, Ι., Παροιμίαι τοῦ Ἑλληνικοῦ Λαοῦ, Φοιτητική Γωνιά, Ἀθῆναι, 1965
Μιχαήλ, Μαρία-Δέδε, 2500 Ἑλληνικές Παροιμίες (καί Λεγόμενα), Σπῦρος Ν. Μπογιάτης, Ἀθήνα, 1981
Rohlfs, G., Italogriechische Sprichwörter in linguistischer Konfrontation mitneugriechischen Dialekten, München, 1971
Smith, William George, The Oxford Dictionary of English Proverbs, The Clarendon Press, Oxford, 1952
Τριανταφυλλίδη, Μανόλη Ἀ., Παροιμιακὲς Φράσεις ἀπὸ τὴν Ἱστορία καὶ τὴ Λογοτεχνία, Ἀθήνα, (年代不詳)

(SUMMARY)

A Contrastive Study on the Proverbs Mentioning Weather in Japanese and Modern Greek (2)

— Weather and Life—

Saburo UKIDA

The aim of this paper is to clarify characteristics of proverbs mentioning the weather, through contrastive analysis of expressions and their background in Japanese and modern Greek.

In this analysis I have pointed out the similarities and differences between attitudes towards rain, a fine day and the hot sun of the two countries.

Generally speaking, one of the characteristics of expressions in this comparison is that Japanese proverbs are much concerned with agriculture, while proverbs in modern Greek are mainly concerned with stock-farming.

In Japanese proverbs the four seasons are mentioned but in modern Greek proverbs summer and winter are mainly mentioned and a few interesting proverbs mention spring rain.

There are many Japanese proverbs mentioning the preference of a fine day, but not so many in modern Greek. In modern Greek we find many proverbs mentioning their hope for the rain in good timing as compared to Japanese proverbs.

In either language, naturally, there are many proverbs saying that excessive rain is not welcome, but that the rain is needed or welcome in good timing.